



今回は、身近にあるアイヌ語を特集しました。
例えば、動物や食べ物の中には、アイヌ語を語源とする名前も多く使われています。

ラッコ (rakko) = らっこ

「ラッコ」もアイヌ語の一つです。「ラッコ」のように一つの単語から成立している言葉のほか、いくつかの単語を組み合わせてできたアイヌ語もあります。

エトゥピリカ (etu pirka) = エトピリカ

- ・ 語源 エトゥ (etu) = 鼻・くちばし
ピリカ (pirka) = 美しい・よい
- スサム (susam) = シシャモ

- ・ 語源 スス (susu) = 柳
ハム (ham) = 葉

ハシカプ (haska(o)p) = ハスカップ

- ・ 語源 ハシ (has) = 枝
カ (ka) = ~の上
オ (o) = ~にたくさんなる
プ (p) = もの

ルイペ (ru ype) = ルイペ

- ・ 語源 ル (ru) = 溶ける
イペ (ipe) = 食べ物

【参考文献】「ポン カンピソ アイヌ文化紹介 3 食べる」
1999年 北海道アイヌ民族研究センター
「知里真志保著作集 別巻」
1973年 知里真志保 平凡社
「萱野茂のアイヌ語辞典」1996年 萱野茂 三省堂

アイヌ語に由来する 道内の地名

北海道の地名の多くがアイヌ語に由来しており、地名は身近なアイヌ語として私たちが触れているアイヌ文化の一つでもあります。

アイヌの人たちは、生活に深いかわりのある動植物、信仰の対象、交通の要所、地形の表現、方位、形態の大小などの単語を組み合わせ、その土地の地名をつけてきました。

そのため、地名の意味を知ることにより、その土地の地形のようすやかつての生活環境を知ることがもとより、アイヌの人たちの自然観を理解することもできるなど、地名に触れることを通してアイヌ文化に親しむことができます。

例えば、北海道には、「登別」や「稚内」など、ペツ (別) やナイ (内) がついた地名が多くみられます。これは、ペツ (別) やナイ (内) はアイヌ語で「川」を示す言葉であり、アイヌの人たちが川を生活のよりどころとして、また、交通路として大切にしてきたことがわかります。

ペツ (pet) = 大きい川

ナイ (nay) = 小さい川



【地図の出典】「アイヌ語地名の研究」山田秀三著
第一巻 89ページ

【参考文献】

「北海道の地名」山田秀三著 1984年 北海道新聞社
「アイヌ語地名の研究」第一巻 山田秀三著 1982年 草風館
「日本民俗大辞典」(上) 1999年 吉川弘文館
「アイヌの人たちとともに」 - その歴史と文化
(財)アイヌ文化振興・研究推進機構
「ポン カンピソ アイヌ文化紹介 1 はなす」「同9 地名」
1999年 北海道アイヌ民族研究センター



アイヌ語に由来する主な地名

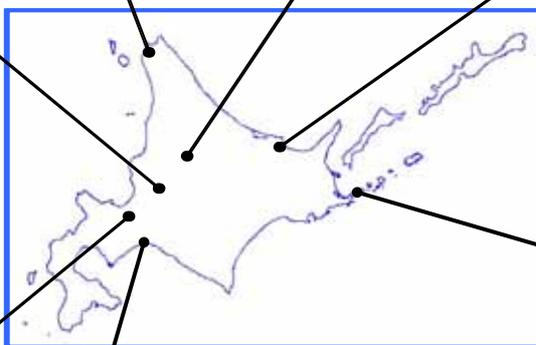
稚内 この地名はよい水の川があったので付けられたといわれています。

現在の港1丁目の付近の旧図には、小川が描かれており、これが〔ヤムワッカナイ (yam-wakka-nay) = 冷たい・水の・川〕と名付けられ、稚内となり、現在の地名となりました。

旭川 旭川市街は忠別川と石狩川の合流点に発達しました。忠別川の意味は「波立つ川」でしたが、その後、〔チュウペツ (cup-pet) = 日・川〕となり、さらに意識され、旭川と名付けられという説があります。

滝川 (空知) 空知川の中流にある空知大滝は、何条にも分かれており、(ソラチペツ (so-rap-ci-pet) = 滝が・ごちゃごちゃ落ちている・川)と名付けられ、和人がそれを空知太と呼んでいました。そのソラチが意識されて「滝川」と改名され、現在の地名となりました。

網走 アイヌの人たちが崇拝する「沖の神の幣場 (祭壇)」が河口付近にあり、その近くにあった帽子岩の辺りが〔チパシリ (cipa-sir) = 幣場 (のある)・島〕と名付けられたという説があります。



札幌 札幌市に流れる豊平川の辺りは、〔サップロペツ (sat-poro-pet) = 乾く・大きい・川〕とされています。また、〔サッチェップ・ポロ = 干し魚・多い〕という説や〔サル・ポロ・ペツ = 葦・多い・川〕という説があります。

根室 根室付近の海は、箕の形をした湾であり、海底には木がたくさんあったことから、〔ニムイ (ni-muy) = 木・箕〕から根室となり、現在の地名になったという説があります。

苫小牧 現在の苫小牧川の辺りは、〔マクオマイ {奥 (場所) ~にある (川)} (mak-oma-i)〕と言われ、現在の市街地付近はマコマイとなります。現在は、マコマイに、沼や湖を指す〔ト (to) = 沼・湖〕という言葉がついていますが、〔トマコマイ (to- mak-oma-i)〕という呼び名は、この奥に沼があった付近の呼び名が現在の苫小牧になったという説があります。

地名の由来については、諸説ありますが、今回は次の資料を参考に紹介しました。

- 【参考文献】「北海道の地名」1984年 山田 秀三 著 北海道新聞社発行
 「アイヌ語ラジオ講座テキストVOL・2」平成21年7月▶9月 講師 菅原 勝吉
 (財)アイヌ文化振興・研究推進機構 発行
 「アイヌ語地名リスト」2004年 北海道環境生活部 発行

「アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会」では、本年7月に今後のアイヌ政策の基本的な考え方と具体的な政策などについて「報告書」をまとめ、内閣官房長官に提出しました。

報告書では、今後、アイヌの人たちの歴史・文化等について、十分かつ適切な理解や指導が可能とするよう教育内容の充実を図っていくことが重要であるとし、

- ・大学等において、児童生徒の発達段階に応じた適切な理解や指導者の適切な指導を可能とするような方策を総合的に研究し、研究成果を教育の現場に活用していくこと
- ・次回の学習指導要領の改訂に向けた課題として検討していくこと
- ・教科書における記述の充実、小中学生向けの副読本の配布数を拡大するなど副読本の利活用の充実に努めること
- ・教職員等への研修の充実、教育現場におけるアイヌ文化等に関する体験学習等の積極的な取組事例の収集・促進を図ること

など、義務教育が修了するまでに、アイヌの人たちの歴史や文化等に関する基礎的な知識の習得や理解の促進が可能となるような環境整備を進めることを求めています。

